

和朝集

波之部

廿四

和書門			
二	一	六	五
一	八	〇	一
號	函	架	冊
類			

內閣文庫			
二	一	六	五
一	八	〇	一
號	冊	架	函
類			

內閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (21)
函號	263 10



倭訓禁前編二十四

波の部

は

葉ハひらハ也也和名抄和名抄葉手葉手とひととよと新様樂記新様樂記も千葉も千葉とらとらひら

とよありとよあり○齒歯も葉葉も同も同當中當中曰齒曰齒とあるとある今今ふふむむふふとと○又又とよとよひひ齒齒の物

と断と断とよとよををととひひの所の所と脾と脾とらとらひひねねの可の可を脊を脊とらとら○神代紀神代紀と麓と麓と

とありぬとありぬりりとよとよむむ字字あれあれ生生の義の義と古事記古事記羽羽と依と依○羽羽發發の義の義とありとあり

矢の羽矢の羽大將次將大將次將鷲鷲の切生の切生也諒也諒聞聞と霞尾と霞尾の羽也の羽也○賢賢と訓と訓和名抄和名抄とんとんゆ

ははとらとらの女孺の女孺ああと是也羽是也羽の義の義と女異と女異ありありと延喜式延喜式元正元正の威儀の威儀と圓賢圓賢圓羽圓羽と

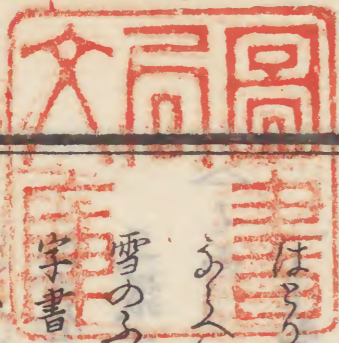
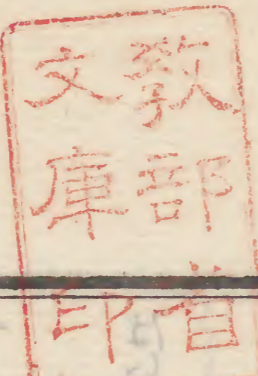
ふふとらとら又横羽又横羽ありあり○色色とらとらの薄の薄ををと夜と夜とよとよとらとらふふとらとらつつけてけてららと詞也

雪雪のふのふららの髪の髪のさのさららの目の目ととよとよ○ててああの辞の辞と者字と者字ををとありとありこの音この音は如は如

字書字書小九言者小九言者所以所以分別分別隔異隔異也とるとるええらら此此り清り清の体用の体用ともふともふありありの濁の濁と

よよむむいいままるる用語用語の下の下ありありともともに事情に事情と差別と差別とるとる辞辞ありありとたとたとらとらばばふふ

れればばと通と通とるとる可可ありあり又其者又其者是者是者向者向者意者意者抑者抑者の教の教の助辞也の助辞也○場場とよとよむ



洞津 谷川士清 纂

倭訓禁前編 卷之廿四

濁音あれともふの略ふも一〇端の音也山端軒端雲の端笠の端ふと
らり〇俗の物のいよあるとらり判の音也〇はのきくともぬとらり欄柄の意
ふるを一〇ありおよひとらり紀の音也又紋紀あり〇敵の城を破るとらり
三議一統よええり方房芳防の假名よ用う

△とあ 著聞集よとあと笑ひてとらりあこの響也〇歎よらり雲名ある
一毛よ小紋の取ありと握々よ似よりとらり

△といま 日本紀小驛と訓せり早馬の意語也いとやと通と傳とはらりよ
あるも世系也後世傳馬とのとらり

はいと 車人とよらりともはらりともやひともつらやひ也
萬葉集よ早人とも書り敏勇の称也車の起り神代記ふとも一車人司和名取
よえゆ〇文武紀よ薩摩を唱更國とらり萬葉集よ車人の薩摩とらり是也

續日本紀よ大隅薩摩二國車人とも唱更の朝廷よ分番と勤らりら史の
心義よ其義よえり更の成卒也

といひ 史の滑替傳小滑替ハ能諧の如くとらり今古今集能と諧作

といひ 誤あるゆ一音大小異らりりり和哥の二体とらりと連歌の俳諧と近と世の
詠ひとせりよりあはれぬともいふ也

といひ 脛楯の義也といふ藤甲ふと骨り史記の注よ脛衣ともえゆ
△はらり 源氏ふえゆ拍子の音也今ひやうとらりふひや互也

といひ 葬をらり本朝之式父為大臣子為無官則葬祭皆以大臣父為無官
子為大臣則葬祭共以無官於異邦者父為大夫子為士葬以大夫祭以士子

為大夫父為士葬以士祭以大夫日本紀ふらりふともとらりともとらり
とらりとのらり詞八日とやうたぶとらりたぶとらり伊勢物語ともとらり

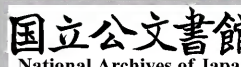
といひ 葬をらり本朝之式父為大臣子為無官則葬祭皆以大臣父為無官
子為大臣則葬祭共以無官於異邦者父為大夫子為士葬以大夫祭以士子

為大夫父為士葬以士祭以大夫日本紀ふらりふともとらりともとらり
とらりとのらり詞八日とやうたぶとらりたぶとらり伊勢物語ともとらり

といひ 葬をらり本朝之式父為大臣子為無官則葬祭皆以大臣父為無官
子為大臣則葬祭共以無官於異邦者父為大夫子為士葬以大夫祭以士子

少く論せり明律より尊長の遺言に従ふとも杖一百と云えり○使琉球録
 子為親喪數月不食肉死者以中元前後日溪水浴其屍去腐肉取其骸骨以
 布帛纏之裹以葦草觀土而殯上不起墳君王及陪臣之家則以骸置藏於山穴中
 仍以木板為小牖戶歲時祭掃則啓鑰視之蓋恐木朽而骨露也○
 明史真臘國の下に死する貧者の海濱に置り羣鴉啄り尽す家人其骨を拾ひて鳥
 葬といふ○千百年眼に今檢葬昏以己亥之日用葬取出謹按春秋之際此
 日葬者凡二十餘人此則葬不擇日可致也と云えり○蝦夷の葬法より
 枕草紙よりとらへたるまわしんと云えり○豆飯を温飽と
 煮よのこしり沸湯の轉音もや
 傍頭とあり字のしく傍側の類にむかひ近來風俗の類
 の物よりふくしてこのことあるがや又款数の中より同事
 のことと云へり○俗語のでさうだいと云傍頭あり
 東鑑右大臣家鶴岡拜賀時供奉行列の中より放免四人と云

えり檢非違使廳の下部と云ふり行行列の各自より其分上と專に務る
 然して列の人数に離れ頃の乱れぬやうに或は闘諍と鎮め或は下部の
 頃より煩々ひある時は人数にかり勢ゆるがりて行列と放免あり
 常よりふくして下部と云檢非違使よりして出する事今昔物語より云えり
 了中右記に元永二年四月六日申云去年賀茂祭檢非違使所相具之廳下部
 等或有鏡鈴等或者錦紅打衣如此過差欲移止と又明月記に御靈會に神
 輿渡り種々風流流施すといふ放免也冠服と心任し用おて貴人のあり
 又ハ故事に造り物とするありと云加茂祭に此事あり後
 二夜に送る御靈會と云ふものにつけおたせり也徒然草より云
 のつけおとつるも是ありと云ふのついでに今深草祭といふもの櫻町の
 放免りの類と云ふ祭の餅持者の手かたりの人今時の練物に如く可天
 と云ふ也と云元正紀に所奏罪人並從坐者宜咸放免と云え宋史太
 祖紀に廣南有買人男女為奴婢轉傭利者並放免と云えり
 是え 哥よと云えあふと云ふことと云映宇のあふ花のたぐえ露のよと云



こがつ

神代紀に廢とよみけふつと音義通せりよて廢集槽と式に種放と

ばう

江戸にて西北の風とこがらとよ

十

所字許字とよみ何はうと辞よふふのこくやどくの二意あり二

て

十と重福とて曉むるうと物いふの程也とてうとてとて鳥と

と

て身也といつと入り相とて二日とてふふとて比とてふも通とて

と

り物と量ふとて詞ありとて可又容ともよみいくらはらもあんと

と

推てふ辞也字書と許の約與之也又可也容也とて史記に如も用可の

如

○古今集よばうとを留とて哥三首あり而巳矣とつけけし助語と似たり

は

うとて三首ありて上と同一

こ

翼とてふ万葉集に羽我比又羽易とて又白たのけはなとてかてと

も

よあせの打交とて羽のそと右と左を掩ふ者ハ雄左と右と掩ふとの

唯

あるとて雨雅とてえと○貝子とて萬貝の系漢土とも貝齒とて

海

巴も同とて紫色のものを紫貝とて上品也ハ丈鳥のものを美紙をとり

て

光滑とて是と用う文房圖賛に貝光祿とて眼科とて貝香

はかせ ○万葉集に春日ある羽買山とて

は

かせ 博士乃轉音也和名抄にえゆ大博士ハ大学博士也小博士あり平

家

物語にもえゆ日本紀に儒字をよめるも系月一四道の儒と称とて

紀

傳明經明法筆道とて也同紀に博士とてとてとてとてとてとてとてとて

尻

はせとてとて○墨譜とてとて博士のするすふんといつて或ハ拍子の

音

轉やとてとてハ意也とてとて○舟の名とてとて越前舟とてとてとて

と

鶴とて似とて○博士木とてとて事伊勢年中行事とてとてとて

は

日本紀にカ祝詞に横カとてとてとて万葉集に御佩とてとて是也け

せ

とてとて軍家と主位と称とてとて名目とて○源氏ふあぬとてとて物花

鳥

皇子の御はうとて供とてとてとて陽明門院とてとてとてとてとて

宝

鈔にふえ世祖の時と始とて羽ととてとて飛とて通用とてとてとて

錢

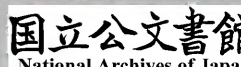
神論とて无翼而飛とてとて扎使とてとてとて猪幣也後醍醐帝の時と始

紙

錢紙行とてとて太平記にえゆ我邦券物の始とてとてとて

墓

原の系墓ハ土以封せとてとて孟軻之母其舎近墓とてとて西



土の俗稱は乱葬岡ふと見えたり一所に定めず葬埋する乃制日本紀三代實録今ふとふえたり俗にむらじら墓所乃轉音也さしきいよふに仏家乃之味よりる大藏一覽に如來胸中三昧之火隨声而發逆出棺外漸々茶毗してえたり○三代格に桓武帝の勅小既空之後酣醉而歸非唯虧損風教實亦深蠹公私してえたり繁華乃地乃民今も亦此嘆あり顧て戒む

何の計畧とわぬまふる一俚言のあどしき老くのまゝ公量もとの限りと極とをせぬを定み常たさす轉してつ寝覺記に岳墓のふらる心得る一○ころころのまのまよふ源氏よりわら石乃たすぬいとも○ころころのまのまよふもさよふあり詞花集よ

力とまゝ人を恨むるころころのまのまよふもさよふありれ○物語類よりぬくふらるる死る事也○定家卿の語に飲いたれくのこむまゝも侍り

たかため

源氏河海に御齒固の才掌中替りてもころころ其具に内膳供を猪鹿突あつて雉鴨とりて代りてえたり世語回答に齒がめいよりひかてしるまゝとらひに近に火切りもらひを用うてまゝとてえたり荆楚歲時記よえり食膠牙錫取膠固之義とらえり○薑薑に六月一日齒堅肝要也

たかまつ

神代紀に花時亦以花祭とてえり墓祭の始あり一墓祭に荒魂の享に熊野有馬村の遺風作くとまゝよと光俊

神みあるむの村にやみらぬんもる乃村にわかみ白ゆ

今も祖先の墓小松をよむにみらぬ事ありともつていふ事もさよらるるや中山傳信録にも折花供墓前とてえり熊朝樂事にも二月朔日城中士女已有出郭青掃墓設奠者とて墓に接神乃宅みありとていふも孟子にも東郭墻間乃才とてえり西土も同一風俗なる一今肥前長崎乃港に清明と申え其墳塋とていふ諸民墓所を集り各自醢飲をまゝ歌声喧擾り五雜俎小南人借祭墓為踏青遊戯之具紙

もろく日本紀乃蔡摺衣万葉集の藤原手折て仍んともこ後より
もろくも衣よわらせし物ありしと和名抄の郡名々名所
もあやまてえて蔡原とありしとよみ藤原といふことよめるは物成
指しや杜子美の楨林礙日吟風葉と作るものもいふ南部よやら
ふ此實は尾張の山ごころいふ深衣を用う○脛とよめる靈異記の脛成よ
み和名抄の脛とよめる新撰字鏡の脛強垣ふともいふことよめる古今俳諧
や土佐日記ふしふことよあけてしるもいふことよあけてしる脛の
今ふ向ふともいふ○衣乃をよめる表とよめる裏河とよめる蔡葉よえより
此衣ハまろく乃時の女房乃服ふしむらう○南京と記し稱する小之日光
もろく稱するふもあやまを觀つてしるを扱ひ大まろく○別は草菘
と稱する一種あり短草と合明草といふ仙臺といふ稱するは芭史明
出といふことよ濱ともいふ○下野国足利郡和泉村八幡山より村正真秀
氏の伐取しむらの末の内は大神宮の三字又ゆめり安永丙申の春内宮車籠
よ來り正しく天造の物あり奇瑞目か驚ぬ小野の藤原よ皇祖天神

成祀の神武紀よる也

元日屋中と掃除ヤハ新よまらぬ陽氣とくくはるれ意あり
よて二日と掃初と五雜姐と閩中乃俗元日より五日や糞土と除く
是令如願の意とくく如願事歳時記よえより伊勢神宮乃俗よ客去
く直よ掃除せむも意近

はろよる 万葉集よ又ゆ又奉仕国守拂部等ともあり掃除清浄
よとく世と治むるまはらる西よも大丈夫當掃除天下ふくえより御門
祭祝詞よ待防拂却とくも同一

吐も掃むかきけこてけくあり○太刀よ帶字靴よハ穿履よハ
着字かろく日本紀よ佩刀も持剣も訓同く万葉集よハ劍着と
たちんくよあり又紀よ所帯とけくせるとありかす友く○薄ハ音を用う
續日本後紀よ禁金銀薄泥とる○神祇伯と伯のくもいふ兼良公類聚扱
よ神祇伯雖亮閩中被御吉服異他之義也とる家記神祇伯雖遭心卷
不着服不觸穢五旬心卷籠居後擇言日出仕專隨神齋とる延曆

中參議大中臣諸魚進家譜云中臣朝臣任神祇伯者是天照大神之主也思世相兼遺喪不解者勅雖不窮喪紀不可供神事宜令修其服之也

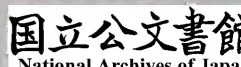
はぐ 矢とくぐの刺字とよめる神代紀は作字もくぐのうに弦くぐもくぐといふ万葉集より強取をげくよめり又木綿よ所作をくげるとよめり拷の皮を剥て木綿とするをりて之○皮の剥よふの刺とよめり○衣を奪ふとはぐといふ禊字とよめり靈異記は禊とすといふあむけとよめり○衣を合せて造るをはぐといふ矢よ意同○蝦夷よて半打とよめり音の轉あり○俗語よはきよはくわるとよめりいふふやう意あり

はぐち 新猿樂記小博打とちり今どくちうつとらふ重言也其人とくちうつとらふ物語よええり○大和物語よくくやうとしてわやよも兄弟よもくすれ足れむかんかよ行んとてとえんしるもくくえりうて博奕よやぐちやうれや○博奕の内よ四半打とよめり東鑑よえの四半打とよめり羽合の衣也万葉集よ羽裳とちり菅家万葉よの羽裳とえん

はくふは 大己貴命の天羽車大輿よのりて妻よとたすよ事舊事記よええり駿河風土記ふくくふ有渡濱に羽衣の事此羽車と事と謬と傳ふ

はくふは 如鳥字印也とええり 又くぐくむとらふ古語拾遺よ音字をよめり左傳注よ今撫育人曰印翼言

はくふは 〇羽車草ハ車軸ともいふ鳥鳳花と事〇内侍所と御移徙車の時ハ天羽車よ載奉は常よハ温明殿の内高床の上よ鎮とす其天羽車の座傍簾外よ置て今羽車ハ基四方有欄干下車也本大己貴命の作也 和名抄よ黒齒とよめり源氏物語紫式部日記榮花物語よくふええり海人藻芥ハ鳥羽院御代以前ハ男の眉をぬる鬚をけき鏡とつくる事一切是ふくくといふ山海経よ東海有黒齒国其俗婦人齒黒漆く又えり和名抄よも文選注を引て黒齒国在東海中其土俗以草漆齒故曰黒齒今婦人有黒齒具故取之と書くハ頃の時よてハ官家の子姓もかねつくくまハありとらふとええり塩漬抄よ漣字成り韻會よ漣乳汁也一云水濁也とらふ一説よ骨と見りす成不祥とらふとらふ齒は漆丸を漆



る法ありといふ○史の世家は黒齒を大吳の國風とて華夷通商考は
東京交趾も黒齒ある事をいふといふを嘗て嘗て故にもしん

く乃らぬ 和名抄は帛とあり音をとりて今義解は帛衣謂白練衣と
るを集解は我朝は白色爲貴色天服也といふ禁秘抄は帛御裝束とも
之胡曹欽は帛御服神事之着御夏生冬練張といふといふ弘仁の詔より諸
會は黄楡漆の御袍と用ひるといふもまたこれ相竹風風襪袴乃御衣也此時
に始りたるかといふ

△ばけ 神代紀は術とあり俗語のむけるばけとも世にありてむけるは
化ばけを魅むけといふ妖物とあり伊勢物語のむけるは一口よくひりり
といふ是也むけといふ俗語も同一蝦夷といふ福をといふ○ばけのむ
といふ俗語ありけり及骨小對といふ俗乃套語之狐皮といふ

とげー 烈をよみけり互にあらはれはくと云通せり神代紀は懐
ともよみあり
むけとありといふ 演義文ふり露馬脚也といふといふと半治拾遺よりと撰

△はこ のむけと射するもまゝいふれば化乃ありりて本性はまゝなる意あり

紀は斗と訓せり義同○廿一きまふまゝとけといふ清器と和名抄は
去のはこといふまゝとあり半治拾遺にもある女の人はこまゝとけりはこ
ぬ日といふまゝとありとありといふ五雜俎は北人不設廁用虎子と○箱崎
は筑前糟屋郡也平宗盛乃安德帝を奉りて稱す所也○箱の浦は和泉日根郡
箱作村之土佐日記

△はこぶ 玉くけこれ浦まゝまゝ日と海と鏡とたんかまゝと
運とよみ又搬とよみ日本紀は轉とあり箱よりと出ると訓しや書經
は國々の土産とけここのといふ

△はこえ 袍乃後の袋とけといふ或は菅衣とあり枕草紙にこのわすれ
ひきはこまゝといふ又女のつがまゝとけといふはあつたが引とこまゝ
といふといふまゝといふ引あげるといふ

はごろも 羽衣也駿河風土記丹波風土記曾丹集ふると神女は羽衣の事

を載りて天上皇都より降るるともて天女ともいふ也一搜神記廣輿記等に
似る事多しなりこれ本つきたる事やまほはるる下の下はゆ有渡濱の
故事の万葉集にも見えたり能因法師の哥よ

うとれ濱天乃羽衣ひししそてうろく袖やうのうろく

伶人家の東遊といふは故事とりて儻曲の作らるるものといふ是も霓裳
羽衣曲と摸せり也一文選注に霓裳羽衣起於開元盛於天宝也といふ霓
裳羽衣曲の舞の装束ふく楊升庵の傳説と云うく不知様あり然るに
小野篁入唐の時此曲を親くして逐一書記に嵯峨帝(奉)自筆の録あり
てが内裏交上の時焼失しぬらう可惜なりとて明彦仲和の雪舟の画
も富士山の題せり詩にも東風吾欲東遊去時到松原飄羽衣と作らるる東
遊の曲と聞傳へていふるあり○いふをよみ合せらるる梵書の故事也○河
内の天の川近江乃餘湖のうもよあり曾根好忠

よこの海よとつかりん女女子の天の羽衣けりつらんやと
○草の羽衣と称するは莖を用ふ著くはうのときたり草と大小は異也

はこや乃やは 万葉集に出づ蘇姑射山にたりわの御門と仙洞と奉るよりなり

はしと悦ひ奉るにけり 莊子に出たり郭注に身中至寶之山也といふ俊成卿

りらと浦あつ子かたともははれ山といふなり

はふよやろ 運丁の系延喜式に運脚とあり運丁の字仕学大乗より見え

より金葉集よ

つさよのはこよやろとねふともよの里人牧せひなり

日本紀に谷字とよみしる地名之今も伊勢近江肥後陸奥ふ

とふ此名あり尾張乃桶はさほくし西も同一○真名伊勢物語に迫字
と填り殿の間とありより姓の間字とありこれら端被間の系あり
一又大和物語に下すこれのはさぬ日中行事に御湯殿乃とさぬともん
え西行の哥に岩のはさほともんえより兼邦撰に贊田の神劔以盗し道行
劔以返し捨く逃さる路に向とさよと云く今海東郡迫間村は劔返迫間
といふ是也

たさむ 夾字と訓せり夾路夾岸ふ是也羽狭めりれ系あり一あり互ひ

あり両傍よりくるまよひつりよて間介攝ふととよあるとよむも同一
まふ互む俗語のはさるるをきけるも意同一又介介と同一一夫曰介と
えゆるの音也○甚よ幹とよあり○蜻蛉日記よみくぐく一夾二はきみとえ
ゆ串よ夾とて献するよりいり座よ意同一

はさき
撰字鏡よ鉗とはしとよあるもさみ及しふをい同系之洞天清録よ倭製摺
置剪刀尺ゆ○かちむさくハ髪とさく也

ばさき
大平記よむけ風又ささるるはさきよふけ又扇くら羽乃を

けり繪ふとええり抜折羅とあり今も粗扇とさくといり千手登若馬
降伏一切大魔神者當於跋折羅手とええり

むさけ
婆娑氣なる一文選注よ婆娑放逸其とええり又新撰字鏡よ婆
娑とてまろがくもくつがくもよみ奉くはせり

△はし
端をよめて始の糸也字彙よ首也萌也始也緒也とる由又音べん冕
よ同一日本紀よ間とよあり間あれの端あり糸通せりよて万葉集よ端とよる間

の意あるも多し古今集よ

本にもあし草うとあしぬ竹けあけし我身のありぬゆり

四声字苑よ竹非草非木とええり出羽よてはしと濁し呼ぶ梯橋とよむも相

間所とわくもとりて名もろあり階も名同一和名抄よ階とよみん古事記よ

埒をよあり正韻よ曲岸頭也とえい神名式よ椅をよむ字書の本義よありと字

書小崎ハ橋也とありハ崎と謬とよや○橋よ石橋土橋板橋圓木橋高橋浮橋打

橋懸橋反橋舟橋棚橋吳橋韓橋等の名あり防州岩園よ錦帶橋あり

錦山より流る川よふ故よ名よ日本第一の風景其結構比とらふ

俗よとらふんばしとらふて俗よ山ハ富士滝ハ那智橋ハ錦帶とらふ○催

馬樂よ橋乃凡とらふ今もはしつあえ○野史よ推古帝乃時帰化せ

路子又巧掛長橋令造遺三河國八脰長橋水内曲橋木製梯遠江國濱名橋

會津閼川橋兜岩猿橋等其外一百八十橋とええり○五雜俎よ天下之橋

吾閼洛陽橋為最計橋長三百六十丈臺江大橋二百餘丈とえい○箸も食

する橋ふるゆりよて御箸の渡るとらふ辞あり新撰字鏡よ箸もよあり今

はりら 柱とらふ掛座のえんとらふ楹も同一○神に幾柱とらふ
 事古事記神代紀にええよりして座字とらふ佛に二軀をひとはしらと
 み一木欽明紀にええ三代實錄に太政大臣一柱ともええより古事記の子之
 木とらふ事ええ私記に蓋古以貴人喻於木故謂神及貴人為一柱一木矣以賤人
 喻於草故謂天下人民為青人草也とええより○大く柱とらふの家々祭
 所の大国主命の尊像豊肥あるよりて人の豊満肥大あるをも大國と謂名を
 如く家の中もそれ大柱とも大國柱とらふ○神代紀に柱は太く高くとも
 へえ方祭集に真木柱太く心ともはつらるる男は心と大國柱は太くても
 太くれとらふ俗語あるも是也○但馬二方郡濱坂に柱町あり街頭に大柱と
 堅何の世に起ると知ると古来此柱とて人の損傷とらふ

はりら 走とらふ走とらふれは同一秋とも常ともさるるは各が讀
 よはうはとらふ習に新撰字鏡に逆とて一とわるとよとらふ日光とて行
 事とらふとらふ○刃の目とて抜出るとはとらふ玉乃盤と走とらふ
 うねり列仙傳に其人刀自墜而自走ともええより○火りて物と焼てはとらふ声

と焼声とええより○安藝の俗語に身の疼むとけとらふ

とらふ 續紀宣命萬葉集にええ神代紀にえとらふ或は本とらふ又始初
 とらふとらふ瑞芽のえあるとらふ出羽とてとらふ清て唱ふ又肇甫載或造賦とも
 始と注と始者ととらふ

はりら 端部のえあるとらふ物に半部とらふ花鳥と下らうとらふけと板か
 と打て上と部と造と外とあるやうにとらふとらふ○車よりとも同一
 とらふとらふ 日本紀に間人とらふ氏姓とらふ今も丹波とらふ所もあると
 又壑部とらふとらふ土師人のえあるとらふ

とらふ 鶴はらふ和名扱とらふこのとらふ鶴也とらふとらふ本に速鷹の
 へ轉とらふとらふとらふとらふ又鷹の家うとらふたいとらふと是也とら
 たり○とらふとらふとらふ詞に鷹はつとらふ体とらふ

はりら 万葉集に愛哉と書くと又早布屋師ともええより助産とて
 やらとらふの轉とらふ日本紀にはらとらふとらふとらふとらふとらふとらふ
 とらふとらふ 万葉集に父母成乃とらふとらふ若向房乃命とらふとらふ若の一とらふ

このゆゑにちうりつ今俗箸折屈の兄弟といふ是之古萩の折箸かといふ折
屈をて「對」もたをて又童謡は「折」をすぬといふ著折未折と
らふる「折」は古の時は著竹幾株かといふも今の「折」二條と一前中
らふて「折」は細く削成る一筋とよりうめく食を取るへといふ

は「たふ」 無間の「たふ」物「瀾」にふと意や一説端方無て「言」せん
うとふ「たふ」は源氏小は「たふ」の意也和泉式部日記
ふ「たふ」の神もさういふなりひらめくあらはれは「たふ」をさす

○真名伊勢物語に強の字節用集「魁魁」の字をよめり何よ出るよ
字乃「魁」も心得る

は「たふ」 志書ふ「たふ」源氏「たふ」は「たふ」書と又ゆ又徒然草
よんえふり東坡「真」如立行如行草「如」は「たふ」意ふて草書をゆめ
語「龍蛇」は「たふ」り文集「たふ」筆還詩債「たふ」句あり

たふ「たふ」 天武紀「圭冠」とり私記「烏帽子」也といふ榛子の形
烏帽子に似たりとて名くるよや今の侍烏帽子「たふ」説「たふ」人○京

室町烏帽子折の看板「たふ」も圭の字の略あるといふ

△はす 馳といふ羽する疾速といふ○蓮といふは「たふ」略也はす根

「藕」根も花葉も藕生するもの「はす」のせん「藕」粉「説」邪「たふ」せん「織」
字「たふ」す「はす」の藕「系」か「たふ」荷「鼻」とり侍中群要「御」手「水」時「有」手「荷」

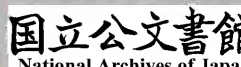
葉○「たふ」きはとあり浮萍の「たふ」○荷葉「たふ」酒とて茎より飲「香」氣ありて
よ「たふ」もと陶器「たふ」と酒陽雜俎「碧」珠「杯」とり○「はす」は「たふ」

「たふ」斜といふ蓮の「たふ」葉「たふ」り「たふ」鼻「たふ」は「たふ」鼻「たふ」は「たふ」鼻
又「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻

「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻
の頭「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻

「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻
と「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻

「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻
ふ皆水精也但諒「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻「たふ」鼻



陸機詩「離合非有常譬彼弦與管」○木とすずあり糸出童子の如く紅葉をばや

△はせ 長谷又谷字とよめる泊瀬乃略也泊瀬の枕詞「隠」○愛宕郡の長谷「たつた」とよむ公任卿の別荘の地也○和名抄「玉茎をよせと訓をり」をばせとの條考ふ也○鎌倉乃海物「はせあり栗刺をるる如し貝の刺其刺と紀州」香著貝とらふ

はせつゑ 文部とよあり和名抄「杖部」も「日本紀」塗部を訓せりと誤ふはちうごよむ

△はそで 端袖の衣ありとらふ

△とら 助語の辞「ら」ぬとの轉ふと「並」く「ら」詞之將字とよあり抑然之辞と注せり抑「反」語の辞とらうとて神代紀「抑」をもよあり又將「抑」も「西」乃文「も」上「句」抑字と用わ下句「將」字を用ふあり或抑將と連用せり古今集よ

時鳥初声聞へありさふくぬー定らぬ衣きりける

こゝありもすゝの意あり日本紀万葉集ふとよ為當二字とよもあり真名伊勢物語「當將」二字を填「り」伊勢物語「女」ありとも思ふとよとら又万葉集「はそやもらう」○端をばとらふ「た」ふ同「機」を繒物の略称とらふ繒をよあり羽字の「や」日本紀「出」て機も繒とらふ出「る」る「ふ」ふ「小」き「げ」は「花」機と「や」も「腰」機とらふ○旗「羽」の「あ」る「旗」は「幾」流とらふ「延喜式」も「考」工記「幡」旗「旗」之「名」也と「少」錦御旗「元」弘の初帝笠置山「幸」る「多」分時と始「る」太平記「ええ」り赤白二幅の絹上「懸」日月とらふ○懺「は」は「ご」ろ「儀」旗を用ふ「神代紀」も「ええ」葬儀「用」ふ「常陸風土記」も「ええ」り○高市郡「波多」神社あり冬野村「も」あり「獲」仲紀「も」あり「羽田」と同「も」や同郡「波多」野井「神社」あり「羽内村」も「あり」姓氏録「波多」祝波多造あり○神代紀「鱈」又「鱈」皆「と」り「奥」の旗「和名抄」俗「とらふ」も「み」も「とらふ」神代「の」奥を「鱈」廣物「鱈」狭物「とらふ」も「狩衣」も「鱈」字を用ふ○陸田を「らふ」火田「古」草葉を焼

てやせしよりの名也烟字島字ニ合せし字之或ハ聖田也といふ○姓ももろ
脇屋義助の部將ハ烟時能あつ○はこゝらふ詞ハ櫛乃字をいひハ字書の正義ハ
は果ハこの名もいふつよハはつとてハ碓宇とあるハ義を取ハ演義文とい
つる撰地の意也○万葉集吹黄の力自りありハ波多の横山ハいふかといふ伊
勢一志郡の波多也大和より此道すぢいふ山川ハ多ク神鳳抄ハ大和作
ふ一説ハ山邊郡の仲峯山也其山下とて野といふ又武神波多神社も仲峯山村
ハあり○土佐の畑ハ土御門院の従さんませハ所也幡多郡ハ保元の初ハ姓音
院師長公も流され後醍醐帝のハ宮も配流ハたつ

はぐ 萬葉集ハ皮字をいふハはぐきハはぐの類ハ端の義也○新撰字鏡
ハ脱とけハふりけハいふ○秦とよむハ秦氏始テ紛綿を造りて肌唐とあ
らむより訓せり古語拾遺ハ見えり○永正記ハ神宮法不知姓職掌号秦
氏例也といふ
はぐ 倭名鈔ハ層とよむハ皮方の義也肌成ハいふといふ
はぐけ 圃とよむハけつらるを孔子も老圃といふまづ日本紀ハ畝をいふ常ハ畝

とよむけハ毛の義物と殖つけらるる義也○和名抄ハ刷とよむハ若聞集ハ馬
の事ハけけかといふハ世継物語ハ御馬めハ出てくせとけとせふとせまを
あらと見えり今も物あらハ著しるを落とよけけとらる○大手をけけけとい
つハ開く義也○和名抄ハ疥癩をいふ

はぐ 古事記ハ大宮の成とらるととよむ彼津とらるの義也万葉集ハ國之
盡とも國之波多とらるとよむ雲のけとてかといふもかといふといふ後ハ略シ
てとてとらるといふとをいふとらら如ハ義もすも果ハ通る俗ハま
はとらとらとと盡とらぬ意也○替手ハ義もあつ日本紀の哥ハ替ハけとてとらと
と○機手の義もあつ堀川百首ハ見え

和名抄ハ籠を訓ハ飼馬籠也と注とらハ旅行の馬より出る語
ありとらと馬とらふハ宇治拾遺ハ見えり行旅ハ人とやとして馬と養ハ
の制とらとらハ孝徳紀ハ見えりハ刷籠の義もあつ馬刷といふとの
和名抄ハ又俗旅籠の字を用うともいふ今昔物語小宿とらけけと開と物
ふとらとらとらハ今の風といふと西土の書ハ行旅籠ハはとらとらとら

今旅店とけくごやとらふ館驛也○俗に機をけくごといふなり○石見國よくまんの津城とていふ

はくふ 神代紀に責字債字徴字ふしとありけくごふ意通(至今も出羽に此語あり)○庭訓の徴使定使とんえり年貢に就てらふ也

くさせ 雪霜の秋よりあり大日経疏に鉢銀羅(鉢也)大佛頂(鉢也)云白也とんえり續後撰集に庭とていふ雪降よりとる舊説よりとて通とていふなり

梵語也越後よりやくやく降雪はいて東武より綿帽子雪とらふ故中国より雪とらふ越路より雪とらふ西國に花を雪とらふ○竹のてんとすくすくの葉也とらふと葉の葉とていふ○万葉集にこさせ

のいまこのころころとていふ用の詞法体よりいひけくご也といふ

はくご 裸をよあり層明の茶古事記に又ゆ 新撰字鏡に既よりあり後説も同じとていふなり○神社に

はくご 幅員とらふ埃囊抄に布の二とてけくごとていふ平家物語にためとていふ

げんふくええりう機張ふる一々々集 觀教僧都

水うみよ秋の山はのうつまうけくごりひりき錦とやん

とてたち 中臣被辞に生層断(死層断)とんえり人と傷とていふ死を

りて刀とためとれとらふ殺害のまこととていふなり

はくふふ 神代紀に織経よりあり万葉集に織けくごもよりあり

くさあし 日本紀和名抄に旒をよあり旗脚の義也

はくご 令義解に真備に別雷神の轟神也とていふ山城國紀伊郡真備に

神社に中島村城南神乃森にあり月清集に雨と城南神に祈とていふ

民の戸も神の惠とていふなり都の南宮居せり

祭轟文に柳文にええ旗轟神と祭ふ禮に虎鈴経にええり熱朝樂事にも

霜降之日帥府致祭旗轟之神とせり

くさぢ 恥辱又慙とていふ万葉集にくさぢもけくごりひりき靈異記に堀もよりあり○は

ちをすくごの雪恥と書に韻會に雪の洗也とんえり○埃囊抄に舍婿とけくごりひりき

とよりありはぢらふとらふりふりふも同○恥を與ふるといふなり古語に

日本けりるまゝ一甲甲の鏡開きも亦りて廿日を用やハ柄を祝ふ事とらる○
はつこゝ又て一草のけりるまゝ秋のよむむらさきの意ありて一万余集一小端と
らる

はつこ 日本紀一孫字裔字をより極字一乃舊事記一喬孫とも又ハ

はつか 祝詞式一初穂倭姫世紀一先穂ふとちう指穂のすぶあうまを神コ
ちうより萬の物の初とも神コをあらはちうて一三代實録一錢のまゝ一所請作之早

穂二十文と見えたり或最花を訓せり天野氏の書一又ハ

まつき 題昭説一下人の物ふとけくさうと木とらふえくええさうえれ舟とつ
意にて泊末はさる一後堀川百首に

ねれ衣々やはつこよけてちとかつとてさうよまれあし人

○辛エシ螺カウ殻の口は長針乃左右コある物を名らると同意成一刺螺也とらる○女官
の服もいり地白ゆりのしめ地の如く小袖也や内コは目と林する官方より
典侍すくと内々行事も又ハ○琉球もいりつととらる針衝のふあう一其俗
以墨手を懸一種々の花卉の状とみすとらる女の幸へ帳房の婦人唇小入墨す

ふき如く

はつこ 古今集一糸とつけと極や美之俗よやつさるもいり

まつき とつせとかくもいりはつせうまの略也○二月初午の日と稲荷祭とハ

貫之家集一延喜六年月次屏風歌の中ハ二月初午いりうすうとらる所と見え
る古事本もいり○須集一二月初午のまゝ

いりりて花とつと花の香を袖よけみつる罪もいりあま
まつきとせうせう此日も花つとらるまあう一まや○新撰六帖一

きりりやう初午のまゝ一とていりけりなつ祭もいり

是ハ杉と挿頭花よすう平治物語一犬貳清盛いりり社一まわりて各杉ハ
枝を折てうりひの袖よとと見えしハ初午とてある一まゝの
有家のキよ

いりり山杉乃青葉をさう一帰るハとらるの諸人

今も紀の熊野一とてハ初午の日神をさう一とらる古一の遺るけり午の日を
用ふハ神の初て現きたす日ふれハ永く祭日とみらるといり

つるる 春日祭年との二月初の申の日也堀川百首よ

二月の初申の身やま日山岑とよむまていさすつる

はづりー 恥をらふけつりきももぢらりももらふはづりよら

令恥のそふり忝辱をよめつづるいよすと四書蒙引よ恥申内生辱自外

生とえゆ○くぐりの森い山城心訓郡と和名枚よ羽東をけつりよとよめり式羽

東師坐高御産日神社大宝元年波都賀志神神稻合信恥しど乃社とら

とづくり心 和名枚よ殿とよめり羽繕くろし反り玉篇よ嘲り鳥治毛衣

とえゆ

△とて 古事記よ最後の字とよむ百祭集よ盡又終又竟をけつりよ

してるともらつ極をけつりよむも同くはくもささくらふ是也いことい

も同く朝忠集よ

人乃世の老とけつりよ早くくさくあすもふけつりよ

○つ木をこてしもらふ羽手のそよ堀川百首よ

宿りせよ朝と稲をほとつりよてをゆひつりよ

○俗の發語よらつ○神鳳枚よ伊勢一志郡蘆原御厨波底御厨と載て今
曾原の邊よ波底村あり式須底神社も一本須を波小作ふ是也

はての心 竟の日也日本紀い國忌日とよむ三代實録よ四十九日とよめり

玉笑零音よ人之初死以七日為忌一忌而七魂散故七々四十九日而七魂散矣とい

り大藏一覽よ中有極多七々四十九日定結生とえつり拾遺集物名よ四十九

日滅隱しよ己がふくふくよ散ぬとよめり諸廻向清規式よ四十九日と大歎

忌とらつ谷饗集よ七々日及百箇日一周忌第三年忌すとい十五経よ配り

蓋百箇日一周忌第三年の儒者の卒哭小祥大祥小准とるありん七年以後

誰定めしよとらふ事と知つりよ十三年忌もふくくえつり六甲

子終て七年十二支尽て十三年と数つりよ胎藏界の十三院よ象をこい

つらつ五雜俎よも死毎七日則備祭謂之過七至四十九日而止措紳礼法之

家不爾也死後朝夕上食至百日止とえつり今俗五十日といつり生よい

らふ如く源氏よ四十九日とあるを細流よあかふらつりよ三代實録よ

従つりよ紋集よての事とらつりも是也又一周忌とらつり源氏よ

君つる涙はまほふものを今何のけそらん

△はとと

服部をよめる日本紀に織をよる又織部をもるをよるけそらん
 の承たお反とよる古語拾遺に秦機織をもる由大神宮式に服織女あり神名
 祕書に以女子号織子以男子称人面とらん○伊勢多氣郡に服部伊麻神社
 あり今機殿と称るとよる糸女よて糸女の織子とらん又奄藝郡に服織神
 社ありよ同し和名枚服部に作ふ是雄略紀よる伊勢衣縫之先也と是も大
 神宮式に和妙衣者服部氏荒坂衣者麻績氏とよる神名式にも麻績神社服部伊
 麻神社ありと○はととれ女孺の執醫の云々其醫とよはととらん續紀に奉醫
 美人更袍袴とよる伊勢羽取山東鑑に足少多氣郡よ志太義廣を殺せし
 所也○伊賀の服部へんころと唱ふ呉服部漢服部の二流あり各酒公の末流也
 とらん○ととりの社とよる式よる阿拜郡小宮神社也酒公の靈祠也とらん
 はととく 秋の始め鳩をよる人鳩の鳴をよるをよる顯李れ款よ
 おまきまはと風の原とよる鳩ふく秋よありやあねとらん

童蒙抄に諺よはとといふとよるまきま意とらん又機上麻を待よる
 人とよる人もよる人よまきまありとよるまきまも鳩ふくまをよる也
 まきまの鳩とよる秋の音とよるまきまとよるまきまをよる也

△はとと

妖巫の歌とよる八幡神小託一鳩の飼料とよるまきまとよる或は
 鳩の卵とよる又定家卿鷹の秋よ男山姥やうひたるたけけりて又注よる
 此評の故事よる款とよる経国大典徐居正序に鳩養物語とよる

△はとと

花とよる春化の訓義よる神代紀よる春と花時とよる唐音よるとあ
 ららん○單葉の音よるまきまの音よるまきまとよるまきまとよるまきま
 筒子にけりまきま○花の雲花乃雪花れ波花乃滝花れ神花の衣ふと秋よと
 らん○花五色とよる独黒色ふると蠶海集よるえとよるまきまとよる花
 黒白分明とよるめり群芳譜よる黒梅花黒如墨或云以苦棟樹接者とあり○
 古今集よ

幸ふまの齡は老ぬるふあれと花ばしとよるまきまとよる

是の詩よる幼花淑女君子好速とあり如き深殿後の風情とよるまきまとよる照し

てのふふふ○花とのくひて櫻のまじりたる後のまじり鶴林玉露上洛陽人謂牡丹為花成都人謂海棠為花尊貴者也○又の録倉右大臣集上

みりけり山入り山人とありてふ花よありやせ

古今集菅家万葉ふしも櫻とよめるの勿論も花とのしよめるも百花といふ

よて詩も其意よんえふ○農家花といふ紅花○三ばふ四ふふたふ人の

行よる花のまよてめたるより乃詞ふる○鼻の初物のはしめまのこし

を皆けふといふ鼻祖のまを通る方言よ梁益之間謂鼻為祖ももて韻會

一人之胎胎鼻先受形故謂始祖為鼻祖とええふ淡路三原郡鼻手山といひて

やまといふ○帝上廣談上欲知時辰陰陽當別以鼻々中氣陽時在左陰時在

右亥子之交兩鼻俱通舟家謂玉洞雙開是也とええふ○鼻根の奇ふる元興寺

の僧守印乃事と仁明紀よ記する今も鼻々あり○俗よ自負する鼻と高し

とて天杓の像とてしるふと秋葉山の像に紫長とてや或は横田彦

神の化神とて神代紀に鼻長とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

ふふ物ふふ○源氏物語の所よ人々鼻の人も忘る心よ入るふふふ

○廣義抄よ武陵のふふと山のふふと出る所とてとて今も所の名よふふと

はふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

満將軍の室町殿といふ花鳥の室所新芽といふ花の寺に訓郡大原野村の小塩山

持勝寺といふ西行法師の植し櫻あり長嘴菴の跡もあり

はふふ

新撰字鏡よ施埃囊抄上細常の縹をよる碧もすく同色皇侃西

碧とらひしを玉元美の縹よ作する花田のふふや月草よとて澄ふとりくるる

や秋も月草のけつとととととととととととととととととととととととと

えととととととととととととととととととととととととととととととと

日本紀よ紺をふふとととととととととととととととととととととととと

薄くやふふととととととととととととととととととととととととととと

石河やあははとととととととととととととととととととととととととと

催馬樂乃意ふふとととととととととととととととととととととととと

離とととととととととととととととととととととととととととととと

放をよふふとととととととととととととととととととととととととと

はふふ

はふふ

はふふ

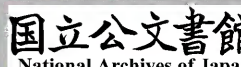
はふふ

はふふ

はふふ

はふふ

はふふ



とほふつて世談字へ ○靈異紀よ脱とよめり

相聚るる物語とるをいふ説文よ吐へ相謂也とるえり無端のそふ
る一 天武紀よ問王卿以無端事とるえり庄子所無端崖之辞とるえり

花鳥の色音ふく常よ秋よよめり四季の花鳥とるふ事あり春の梅の實
夏の外の花よ時鳥秋の菊小鳥冬に雪花よ水鳥とるなり ○文集よ天竺未有密采

艶色者當時号花鳥使とるえり
白氏文集の聲華成よめりこれくも昔も京洛色華客今作江
湖潦倒翁色華功著潦倒垢老よく一字は開く二字よ各よる也是西域二合

の法也
上東門院南良乃都の八重櫻を我櫻と名りて伊賀國よ余野と

らふ庄と寄て花垣乃庄と名け此木よ墻をせむらら花の盛るとは七日つ直い
て是とちとせりる今よ彼庄寺領とる破石集よええり新續古今集よ永

仁大嘗會悠紀方并風よ花垣里

白妙の木綿とるよて神する卯月よは花垣乃まき

○兼好集よら菩提樹院の藤も冊余野村よあり伊賀郡也
古今集よやよひつてり日花つとるる女もとるえり

花供の用小野山よ出て摘とるよやみつね集よ花摘
鶯のこゝろふちとるる香よめり我つむ花好とるなり

昔の春の内よたると人も野ふ出て花のらるるとつて手向をて无縁の畫
をさつとひまふ事ありとる六帖よ

舟岡よ花つむ人のほはてとるて行らんやらつてり
花際のみ月草の花りて傍ふとる古今集れ世中の人の心ハ花

やめのとらふと六帖よつて草のこまら
錢をらふ致書よ多く馬のこむむけとらる藤立人の馬の鼻よ向ひ

餞別するれ意の飲食よ餞とらひ貨財よ贖とらふ又代とるやふと程儀ふと
いら

新撰字鏡よ噴嚏和名致よ嚏とらるるひらひの飯のふあふと

と代々の世系をむすふは乳母のあはれに母兒のくまひる時々の人の
鼻と合とて又とてとては合せられ其嘔る兒は害ありとてふ
のうらみいとらり尼のやうあひ君のうらみとせし徒然草とてえたり
ふをつく
俗に主君の前達さるるとらうつ母物語に皆ふつとてなれ
ぬとてえは草子よ小突鼻氣とてえたり

ふふのかう
花の芽は菊をいふ諸花の後とて花なき珠残花とも称する物也
ふふのいもや
増基法師熊野紀行よゆ有馬村に伊弉册尊とてくまつり

る所といつ花時亦以花祭といつは据りて旗と造らむいふてく神とつ
けて花とせり夫木集よ

神はつる花の時よや成わらん有馬乃村ようふ白ゆ
はふやてふや
源氏小花や蝶やとけけのやあはれとてゆ枕草紙よ

ふふよをれけ
源氏よゆ花よ心を折る俗に我をふふとてく
はふゆもてく
真と紐のてふいふ人よ遠くあはれとていふぢやてり万葉集

まゆ根うと鼻ひ紐うけまてやもいつうえんと思ふ我君
△はふ
日本紀に埴又土とてうらふの略よいつらの古語よ一埴は黄土也
と注せり万葉集よ黄土も赤土もあつ○老子に埴埴とは土を任やとてく
来たり

はふ
土師の字をうらうとてうらむ略とていふるの義音あはれと土輪
ふと造り初る後と土師氏と賜ひ一日本紀よえたり○和名埴は黄
土とてうら略とていふとてく○遊女土師の万葉集よえたり又浦生珠
名按古等の致ものまら

はふふ
萬葉集よ黄土とてうらうふ其ある所とて生のか也○埴生も訓同
とふふ
日本紀に埴輪亦とて埴物とてえたり埴に天皇は時よ始まら私記に山陵

縁邊作埴人形立如車輪者也とてえたり今諸国陵墓の舌きよひ多く埴の形とて
並つてその体車輪の如く塚上よあつ埋りて是所謂埴輪とて河州應神天皇
の陵のいふ埴州仲哀天皇乃荒陵の花壺とて稱するも是也

はふらふら 和名抄に半月をうらう半月の五種不男の一なるより内典にえゆとい
つはふら半の音より月を二つ割て男女の体をあらはしよりいふなり一誤り
くふふらともいふ一埤囊抄にええうら本草に五不男の天捷漏怯愛也天者陽
痿不用古云天官是也捷者陽勢闌去寺人是也漏者精寒不固常目遺洩也怯者
舉而不強或見敵不興也愛者形兼男女今うらうらう本草に名二形とえゆ○
和名抄曲調類に埤破あり

とにぶふ 和名抄に匝をよみて半挿の俗用掾字所出未詳といふ柄あり
て半の其内と扱むとのく○延喜式に酒密匝都婆波匝あり儀式帳に波佐布と
もええうら堂上衣服乃調度今もはぶらとらふ湯はくの属ありと俗に齒ぐらめ
の具はたぐらふと謬と稱せり○うら不物語に白うら乃はんぶ白うらのまは箱あり
又ゆ

とね ともゆらとねふら互にはわる語古事雄略記の秋にえゆ羽根より出る語
あり一
とね 和名抄に翮成よりみ一云羽根也とええうら○鎖よえ福とらふ鑑とと積と

とらふ 撥とよらうの換開也と注せり又做とよらう万葉集にうらふらとらふとらふ
翮より出る詞あり一○頸とらねふら切字をよらう切頸之交ありは是也韓非子に
抽刀而切其脚とある馬の足とらうまらうら切の横ふらうとの意あり一とらう○
馬のとねふら支踈のふら取字のたたら○書法にうらむのふら出

はのくさ 少一の草とらう
とのゆめ かくらうらるる夢とらうらたゆめとも又ゆ
とら 續紀實命萬葉集にえゆかとも和名抄に阿姉もよらう字彙に母妹曰
嬢とらゆ○西国にそかくとらひ長奇とらあひとらひ佐賀とらあふら出羽とら
たぐらふあひに阿姉とらあうらうに阿母とら一嫡母の父の妻とらとも子
を生してふ妻とらあうら継母の父再娶一正妻也養母の切らう他の家よ養育せ
られし者とらふ慈母の所生の母死して後父妻とらて養育せらるる者とらふ
嫁母の已う所生の母父の死後他嫁一らる者也出母の實母とらふ父とらと出せ
者とらふ成母の實母とら非とも父の妾の我兄弟を生一者とらふ乳母の所生の母と

代まで乳哺せし者也已る實母を合て乳母も三月の服あり我邦よふ
一〇古語拾遺よ古語大蛇謂之羽々くええり

祖母とらふ教民要録よ婆々長孫氏年高無齒くええり新撰字鏡
母方のたぐええり〇小兒乃糞とげとらふ唐話とらふ〇くは濁りてむ
くは母の重る也

幅をらふ絹布よふ羽端のなまき一又くは略語とらふ新撰字鏡
よはわくやこやめり

難又拒又沮とよめりけりる意通る新撰字鏡よ彈擊とげめめ
せるまき話とげめりる難問の意也

古軍記よ天香山之天婆々地とええり式よ大和國有封社小仰て採
進ら一むとらふ奥義抄よ大和國笛吹社よりなるもとらふ此社思海郡笛吹山
よあり和名抄よ櫻桃一名朱櫻を訓せりるれいふとらふ同物とらふとらふ
同よ埃囊抄よ合歡木よ對馬牟田氏乃説よれいふ今よふ即樺也平倫久乃説
よ大櫻よ似て花さるぬ物のわな葉の赤く物とらふ〇今の姓よ波々伯耆をけり

とよめり大平記よえゆ

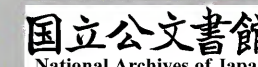
今及和名抄よ脛巾をよめりる行纏とよめりる佩のなとらふ幅
も同よ日本紀よ脛裳をくきもよめり今乃脚絆も同よ〇山城國大原の
新と賣女の脛巾へ前の方よて合せ結ぶ昔建礼門院此山よ入せよ新と戴き
下山あるを人買きとらふ頼てうらむむせよ其餘風也とらふ〇乃ふらむ
纏の轉せるも一盛衰記よ脛巾金とえゆ鈕をよむ心得とらふ

新撰字鏡よ悼をよめり日本紀小難字重字をよめり〇一間よ
むかふあたらははひるの轉也〇とらふの関へ奥州よありとらふ源官方朝臣
の陸奥守實方のりよらひ遣りる致よとらふ罪ありとらふ下さるるもや

聖武紀の詔よ淨く明くけし心をりて婆々か比供奉とええり
助語よらふけしあしはひとらふひあらしひあらしひのたえ

延乃意あり〇灰ハ土火のなま字書小死火と注せり新撰字鏡和名抄同よ又
字書小灸もよめり〇和名抄よ本草を引て洗衣黄灰あり燒諸蒿蒸練作之又拾灰

あり燒拾木葉作之並入深用今按俗所謂椿灰等是也とえり〇兼和五年兩灰



秋有年俗云是米花也... 明和の初年京大坂の五月の初灰も... 古車
仲哀記の真木灰納^{ヒロ}執亦著及比羅傳多作皆々散浮大海以可度... 延喜式
色料もも真木灰八斛とあり或は被灰... 魚を浮... 鎮火祭祝詞は更生
子水神執云國語は夫苦飽不材於人共濟而已... 釋紀は葉盤^{ヒロ}柏葉の盛
物也と葉ふも... 海に浮... 著魚は供... 意あり

偽菊を... 延指の... 紫は... 藤の花池... 物...
灰を加...
紫は八... 藤の花池... 物...
蓮の波悲...
菊を... 延指の... 紫は...
灰を加...

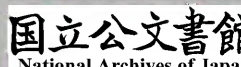
平家物語... 山城清水寺... 破風あり
古今集... 羽振の... 破風あり
古今集... 羽振の... 破風あり
古今集... 羽振の... 破風あり

破風あり

古今集... 羽振の... 破風あり
古今集... 羽振の... 破風あり
古今集... 羽振の... 破風あり

けり

神代紀... 祝部... 建角身命... 尾張
神代紀... 祝部... 建角身命... 尾張
神代紀... 祝部... 建角身命... 尾張



とあり○諏訪の社に擬祝部副祝部あり

○雛遊よりなり○天
かつの遺意といふことばふこふともいふありこれこそ母子のむつみを教
ふりゆふふ一と文徳實録の母子草と云々も考知一と日次記に這鬼といふ
の撫物ありといふ

○万葉集に祝子とあり祝部と同しと云々貴木立に社ありといふ

新勅撰集

神垣に口ふし深の衣とく紅葉はゆらぐ人やはつら

諸社の祝部皆黄衣あり知一熱田の祝家も近き比まき黄衣ありといふ
一と津衣を着又大紋の布直衣を着るといふ古の姿あり

けふむ

神代紀に昆虫より和名扱に跋行をりといふあり飛虫ともいふ
雄略天皇の御秋は蜻蛉をもけふむといふありと云々飛鳥といふこととて継
体紀に飛天之鳥と云々伏地之虫と云々といふことあり○大殿に波有虫の禍
と云々上つ代に国荒く家の構も疎かといふ昆虫の害ありと神代紀にも昆虫之

災異ええと古事記に醜男命の蛇室に寝るといふ是也○中臣後詞に昆虫の災
と云々の犯罪の部あり自然にある事とていふあり後世もある蛇を祝て災を
ふす事といふこととて貞觀式に高津神高津鳥の二つに無て直らに昆虫災畜
卧とてけてあり

と云つ

枕草紙にえゆ拾芥枚苗乃部に葉二つと出ると江談に朱雀門乃鬼苗
又青葉と号はるとり十訓抄にこれ青葉とい別之鬼苗ハ源博雅の相易とて
いふ後の尚方に入ると

と云ふ

けふふ

万葉集に延をよあり袖をよ系とけふふといふ日本紀に組もよあり
侍字をよあり又とてふとらふ神代紀に在をよありと云々からやといふ同
一とて秋の辞をよ侍とてあるを消息とい候と云々源氏にけづりたうぶといふ
いけつあふのそ也

と云ふ

と云ふ

神代紀に濱又汀をよと新撰字鏡に溜もよあり端海のみと云々○
甚よ濱といふも濱の真砂の意といふことと後撰集に

くもりけかき 基俊哥合の判はくもりの神はくやの葉と守ふ神はあはくりく
弘仁式三綱拍の條はくもりの神はくやの葉と守ふ神はあはくりく
神を了すや萬葉集は

家にあれけけけけ飯を草枕旅うあれけけのきりり
越前氣比の神と日本紀筒飯とあるとくもりの神はあはくりく
繁とくもりの心を藤原基俊

玉うけのきりり五月雨はくもりの神のあはくりく
漢書は栢者鬼之延也

△はや 嘆乃辭はくもりの日本紀はあはくりくやあはくりくやと吾孀者耶も吾夫

何恰ともせせり又秋あはくりくたくみや万葉集は君とくもりの神はあはくりく
くもりの相はくもりの神はあはくりく源氏よりの者ともれあはくりく
と淡く又五節はくもりの神はあはくりく拾遺集は菅家

君は注宿の木す名をゆくくもりの神はあはくりく
○古今集は今のはやはくもりの神はあはくりく拾遺集はくもりの神はあはくりく

のもしやの意○心あはくもりの神はあはくりく頼ひ葉ふ意のくもりの神はあはくりく
○口語はくもりの便字を譯と早もるあはくりく

はやす 又やくとやくはやくもりの神はあはくりく

又やくとやく映の系自他の異○草木とやくとやくはやくもりの神はあはくりく

のやくとやく春秋は今人舉重出力者一人唱則為號頭衆皆和之曰打號てやくもりの

音頭難方とやくとやく節分の夜は豆をやくもりの神はあはくりく

ふひやくとの轉あはくりく○元服は髪をやくもりの神はあはくりく

やくとやく生とのやくとやく俗はやくもりの神はあはくりく

此家長御心之林はくもりの神はあはくりく萬葉集は吾角者御坐のはやはくもりの神はあはくりく

くもりの神はあはくりく林小林の姓は太平記はやくもりの神はあはくりく

と説文は助舞声とやくもりの神はあはくりく始乃風流をはやくもりの神はあはくりく

鼓吹の意也鴨長明
林寄は伊勢の内宮はやくもりの神はあはくりく拍子の音轉はやくもりの神はあはくりく

助語ありて一靈異記に過をよみたり速くと注と神代紀に急峻をよみたり致
し今いとや秋はゆるふとらり又とやとらりといふよりとらりの意とむし一の意とあり
源氏にはゆるゆるもええたり新古今集辞よりとやとらりといふは昔といふ人如
し出羽といふといふ〇姓といふは盛衰記にええたり

とやち 神代紀に疾風又迅風又奔波舊事記速飄和名抄に暴風とよみたり今た
やと暴風八月に風也陸奥とて難せりといふ為家卿

はやふ 速を用うといふ辞はけやり男れり此者心のはやふといふ是れ物といひ
はやりといふ詞寶物集にええたり〇世に流行する事といふも速く行ふ意か
るしよとて時行とよみり又発行といふ

くやたつ 八雲御抄に川をくつとええ喜撰式に若詠河時とやたつといふとええ
と速立のたつとや堀川百首に

関瀬ともやとともちとねとやたつのみふきりりる川のふくれ
此歌に川とよみれといふたつは速滝津の畧といふとや

はやふね 和名抄に舸をよみり直島船嶋船あり今しは関船に新千載集に
みりふ事漆とらふとや舟乃とらふもあね意もさるか

とやちとや 初矢身矢あると一矢二とちを一手といふ的矢といふ詞に西土
の一手の矢四條とらは物語に

くやとあり 新撰字鏡に凍をよみり暴雨也といふとら出雲風土記に彼
夜に雨久多美山倭姫世記に速雨二見浦といふ皆枕詞に神名式阿波國勝浦
郡に速雨神社あり

△はや 生字映字とよみり万葉集にはゆかといふとら拾遺集に
あやといふといふといふといふといふといふといふといふ

△とら 原に日本紀に開をくくといふとら意に筑紫入といふといふといふ
高天原蒼海原豊葦原といふ皆廣平乃をいふといふ万葉集に國原といふといふ説文
に原高平曰原人所登也といふ〇日本紀に林ともといふ竹といふ松といふ檜といふといふ

ふ是くといふ○腹ハ人身中の原と云へ一武備志ハ肚をいふ○夫木集為家
鈴鹿山関のくくろ花薄袖よりけくたをまねくらむ

是ハ関の迹とあり原村あり野廣く薄多き所ありいよるふと一○神代紀
一癯とより人の腹ハ似る西土も瓶之大腹小口ふと云ふ○源氏小
五六のくくろつハ撥刺といふ琴の手ハ五六ハ絃といふ一絃ハ散声一絃ハ按声二絃ハ
声れくくろ弾るをいふ○姓ハ京あり花營三代紀ハみゆ

はくむ 妊娠をいふ日本紀ハ雄身所懐所娘有身有腹ふと云ふより腹産

のふく○埃囊抜ハ人の母胎ハ在時第廿の七日ハ至て人相皆備ア手と以て面と
推て躑躅ハて坐すといふ禁河の書守混池之始の傳ハ同一○系圖をいふ何
腹といふ事日本紀續日本紀ふと云ふより母家よりて氏族の別をといふ
辞ハ○俗語ハよりと踰てもけくむといふハ中ハハ袴のヤラハ日本紀ハ易産
腹者以禪觸射即使懐腹と云ふより善見律ハも懐胎七種を立て一者身相
觸二者取衣といふ

はくろ 和名抜ハ鯉魚といふよりされと取未詳といふより新撰字鏡同一

又鼈と訓を江次茅官曹事類風土記ハ鰯也といふ式ハ腹赤と云ふらふあの
音ともまををりていふ腹黒の五ふれハ腹赤の贅を奏するも赤心の表ハ示
ふと一神代紀ハ赤心をきよけくろといふより元日ハ腹赤の贅の奏あるハ聖武
天皇より始より年中行事の秋ハ

この春乃千代のたけの長濱はけいも我君けいも

長濱ハ肥後国ハあり玉名郡長渚濱より出て赤信魚と号と今北濱ハ鯛と焼
て賣りり景行天皇の故事あり風土記ハ云ふより今其所と腹赤といふ供
御の池あり○伊勢国河曲郡ハ長太村あり此村より大神宮ハけくろの御贄と
献る鰯也○東原腹赤後姓と改め都ハ三代實録ハ云ふ二人とすハ非
とも 神代紀ハ驅除又撥又拂をいふより羽より出る詞ハ新撰字
鏡ハ件をいふ除也と注あり

はくひ 神代紀ハ解除又被といふより廣韻ハ音拂と云ふ毛詩ハ被と弗とも
作ふといふの音ありを被と通用わくむつの音とせり訓ハ拂ハと名目ふら
神代紀ハ云ふ伊特諾尊素彥鳴尊二大神の御ことと合せり後除身淋

和名抄の勒肚巾をよめる腹纏と西宮抄東書よま扶桑畧
記大原野行幸鷹狩の諸衛官人著袴衣腹巻行騰と見えたり○兵家よま
鎧の敷也胴の板を小くする鎖よけ置貝豆のてくく綿嚙のりくと鏢番よ
あて前よりあて着し後より引合せ紐よ結ふ庭訓の宿直腹巻の番貝豆
とらふたり○船のてくくを廻しむふ綱ともいふ

和名抄の痕をよめる兼好なげきまいたの腹ふくまといふ
へ東坡の忍事腹如囊といふ是く出羽の俗の腹がくつちいといふ

針といふ鍼も同一突け轉えといふ名義集よ曲鉤と翻して濠利と
いふも見えたり磁針といふも棘針といふも各同一○童蒙頌韻よ接をよめる
家の材具也大殿宗よ梁をよめる○梵よ頗黎といふ水晶といふ本草よ別よ出せ
又いふやの内の一國よ所造玻璃極佳甲于天下といえたり世方よ水精の琢磨
といふ頗黎の琢磨といふ俱よ五色ありて其品かのつうかてて○世よ浄頗黎
の鏡といふ事佛經よ見えは碧頗黎鏡の梁四公子記よ見え又頗黎鏡といふ事も物
よ見えたり又千里鏡磨玻璃所成者といふ字通よ見え琢磨といふといふあり

又中山傳信録よ今西洋船用玻璃満定更簡而易曉といえたり
禁秘抄よ張兒といふ今のこころや○張籠の事もあり脱絛のりともや

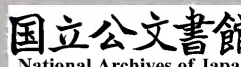
○児女のりてあまの天けりて誓禮の具の御と代の大代の故事よいふ
とや

播磨とまら古事記よ針間てる也新核樂記よ播磨針といふ赤添衛門
集よとまらよりまら針をたてると見えたり針よいなる名ありて相撲の
ゆよとらまふげあり

赤よとら破邊の岩はれふておのそとらとら沖津白ふと
日本紀よ茶摺衣と見えたり大嘗會式よ榛藍摺錦袍といえたり榛摺
と山藍摺と二事ありとや

春の發の糸万葉集よ春の張作といえ修の秋よこのわらと見えたり
○秋の類よ初春早春とも早春初春とも次第せりさし同意と見え○壘とよ

むも發開の糸く治をよむも玉箱よ壘の治也といえたり張も發の糸之皮よ幾張あり
らり又鼓よとら周禮よ靴鼓といえたり冒鼓も同一冒音曼也○倭名抄よ府瘡腫



をよむも音同し。○發の開とるきとよむの義也。○礼ふとるるとらふ貼字。○古人の名。春風月影兄弟の名いと艶也。魚名公の曾孫也。○人を打とるるとらふも張の意。ふら。良基公榊葉日記。神人をとらふ。た。ア。ふ。と。え。ゆ。○名。よ。を。よ。め。ら。ふ。の。義。也。○よ。つ。ら。う。つ。つ。ら。う。つ。ら。う。の。助。語。よ。ら。ふ。の。音。の。一。の。ふ。互。子。也。

はるき 日本紀の開をよめらふ。音通ず。

くろく 暗とらふ開。暗の義也。○新撰字鏡。露をひらね。よめらふ。雨止てえ

る也

たろく 遠をよめらふ。悠も遠も同し。又懸もよめらふ。開。字。は。意。致。よ。め。ら。け。き。も

よめらふ。日本紀。よ。め。ら。ふ。の。靈。異。記。よ。め。ら。ふ。も。え。ゆ

なるる也 万葉。よ。春。之。在。者。と。ら。ふ。と。え。ら。ふ。と。ら。ふ。も。よ。め。ら。ふ。も。あ。互。子。也

と。濁。ア。よ。め。ら。ふ。○秋。よ。れ。が。冬。よ。れ。の。詞。ありて。夏。よ。れ。の。詞。よ。ら。ふ。も。あ。互。子。也。ア。て。朝。よ。れ。が。夕。よ。れ。也。

るのち。呂の調とらふ。催馬樂乃呂。新。年。梅。枝。櫻。人。ふ。と。え。ら。ふ。

はるをあらはしむ 源氏。よ。女。の。春。を。あ。ら。は。し。む。と。え。ら。ふ。詩。よ。有。女。懷。春。古。士

誘之とらふ

これ 俗。よ。れ。の。衣。服。と。ら。ふ。の。座。席。と。ら。ふ。の。法。例。の。義。也。○諸。の。辭。も

ら。う。催。馬。樂。よ。え。ら。ふ。○晴。腫。と。ら。ふ。も。え。ら。ふ。也

えらふよ 皇極紀の致。よ。ら。ふ。と。ら。ふ。も。え。ら。ふ。も。え。ら。ふ。也

よめらふもえゆ皆通也

えらふ 安開紀。よ。備。後。國。葉。若。也。倉。あり。東。鑑。よ。伊。勢。國。葉。若。と。え。ら。ふ。

鈴鹿郡の邑名也。神鳳抄。と。え。ら。ふ。也

えらふ 源氏。よ。か。ん。や。紙。よ。ら。ふ。の。刑。を。と。ら。ふ。と。え。ら。ふ。也。後。禊。の。禊。と。ら。ふ。配。よ

ても通ず

えらふよ 配。所。と。ら。ふ。配。流。の。所。は。ら。ふ。罪。を。と。ら。ふ。と。配。所。の。月。次。と。ら。ふ。也

い。心。あり。言。は。河。海。よ。野。相。公。在。納。言。管。家。西。宮。左。府。帥。内。太。臣。拔。群。の。才。成。り。て。罪。ふ。く。し。て。配。所。の。月。よ。報。く。人。勝。て。計。へ。ら。ふ。也

とらふ 日本紀。よ。蝕。字。を。訓。せ。り。日。月。の。蝕。は。虫。の。木。葉。を。食。ふ。と。ら。ふ。也。食。餅。の

矢ふまし俗に名をみくらしきくし日蝕月蝕に禁裏御坐の間を包みしを
るす濟湯殿の記よるえより○舶来の品に兩蝕儀あり

△とあき

羽音のやも新撰字鏡に類をくねさくしよあり



倭訓栞前編二十四終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, mostly illegible due to fading.]

